

北海道乙部町伝世の木綿衣ほか

—平成27年度新収蔵資料の紹介—

大坂 拓

- 目次
- 1 はじめに
 - 2 資料収集の経緯
 - 3 資料の概要
 - 4 刺繍の技術的特徴について

Key Words アイヌ民族 (Ainu)、木綿衣 (Cotton robe)、前掛け (Apron)、乙部 (Otohe)

1 はじめに

ここに紹介するのは、北海道博物館が平成27年度に寄贈を受けた木綿衣1点および前掛け2点である。

3点の資料は、いずれも北海道乙部町の日沼家が旧蔵したもので、アイヌ民族が製作したものを入手したとの情報が伴っている点から、背景情報が明らかな資料がきわめて少ないアイヌ民族資料の中にあって貴重である。

以下では、第一に資料収集の経緯についてのべ、第二に資料の概要について事実記載をおこない、第三に刺繍の技術的特徴について、模式図と写真を併用して作業工程の記述をおこなう。

2 資料収集の経緯

本資料の寄贈者である大黒登美氏は、乙部町緑町で商店を営んでいた祖母、日沼ヒサ氏 (1897年生)⁽¹⁾より、日沼氏が物心ついた時点で既に本資料が日沼家に所蔵されていたこと、クマの毛皮と共に「アイヌの人からもらった」との由来を伝え聞いていた。

日沼家は、大黒氏の高祖母の代にあたる嘉永6 (1853)年に「南部の殿様」に伴って北海道に渡ったと伝えられていることから、資料は1850年代以降、1900年代までのあいだに日沼家に伝わったものとみられる。

その後、日沼家は昭和初期に函館へ、まもなく東京へ転居し、さらに戦中の空襲を避けて福井へ移ったが、資料は一貫して保管されていた。

平成27年6月、北海道博物館に来館した大黒氏より、資料の散逸を防ぐとともに、故地である北海道での活用を希望して3点を一括して寄贈したい旨の申し出がなされたため、資料審査会を経て、平成27年12月3日に正式に寄贈を受けた。

3 資料の概要

(1) 木綿衣【収蔵番号180910】

表に縦縞の木綿、裏地に紺木綿を用いた袷。文様は幅約9cmと幅約3cmのテープ状の紺木綿布を紺木綿糸でかがった上に、やや淡い紺の木綿糸でチェーンステッチを施す。

計測値は、総丈136cm、着丈131cm、総巾125cm、袖幅32cm、肩巾31cm、衿巾13.5cm、前巾25.5cm、袖丈46.5cm、袖口18cm。

(2) 前掛けA【収蔵番号180911】

木綿衣とよく類似した縞木綿地、裏地には紺木綿を用いる。文様は幅約9cmと幅約3cmのテープ状の紺木綿布を木綿糸でかがった上に、淡い紺の木綿糸でチェーンステッチを施す。

計測値は縦62.5cm、幅60.5cm、腰紐の長さは着用者から見て右が86cm、左が89cm。

(3) 前掛けB【収蔵番号180912】

紺地の木綿製で、裏地には紺木綿を用いる。計測値は

大坂 拓：北海道博物館アイヌ民族文化研究センター アイヌ文化研究グループ

(1) 日沼ヒサ氏は、『北海道商工名録』(北海道庁商工課編 1930) 172頁の店名索引(ヒ之部)に「日沼ヒサ 五六二」との記載がある。562頁には該当の記述がなく、561頁掲載の「爾志郡乙部村」で荒物・雑貨を取り扱う「田沼ヒサ」が、日沼氏の氏名を誤記したものの可能性がある。本件は函館市中央図書館レファレンスよりご教示を受けた。

縦66.5cm、幅44cm。腰紐の長さは着用者から見て右が83cm、左が86cm。

4 刺繍の技術的特徴について

本節では、模式図（図3・4）および写真（図5）を用いて刺繍の技術的特徴について述べる。幅約9cmの置布が使用される部分を「縁辺部」、幅約3cmの置布が使用される部分を「展開部」と呼称する。刺繍は連続する単位毎に「線」と呼称し、「作業方向」はチェーンステッチの形態によって判断した。「始点」「終点」は線が途切れる場合、チェーンステッチの方向が転換する場合に明確に把握できるが、こうした事例を除けば把握できない場合が多い。

なお、模式図（図3・4）は線の構成を分かりやすく示すことを目的として作成したもので、線相互の上下関係を正しく示すものではない。

(1) 木綿衣

最初に、文様を構成する線の配置について記述する。袖口のチェーンステッチによる文様は、左右ともに4本の線で構成されている。刺繍の作業方向は左右で異なるが、線の始点・終点はよく一致している。

襟周りの文様は、前面を構成する5本の線のうち、2本は襟周りで完結し、3本は背面の文様に連続する。作業方向は全ての線で左襟から右襟へ向かう。背面の文様で襟周りと連続しないのは赤で示した1本のみである。

裾周りの文様は12本の線で構成され、縁辺部のみで完結する線が2本、展開部のみで完結する線が2本、縁辺部と展開部に連続する線が8本である。袖口・襟周りと異なり、他の線との交点に始点・終点を設定した部分が3箇所を確認できた。

次に、交点部分の処理について記述する（図5左）。縁辺部では、全ての箇所では布の端部を左に置いた状態で手前から前方に刺繍が進められ、複数の糸が交差する場合の施文順序は、縁辺部で3本の交差が出現する箇所では、刺繍の進行方向に対して直進する糸が最下段、右側から左側に向かう糸がその上、左側から右側に向かう糸が最上段となる箇所が49箇所のうち48箇所（97.9%）を占める。

縁辺部と展開部の境界で2本の交差が出現する箇所では、刺繍の進行方向に対して右側から左側に向かう糸が下、左側から右側に向かう糸が上となる箇所が24箇所のうち23箇所（95.8%）を占める。例外的な1箇所は、刺繍の途切れにあたるため、重なりが生じていない例である。

以上の観察から、本資料では、刺繍の進行方向に対し

て左から右に向かう線を最上段とする強い偏りを指摘できる。

図5左に、写真を用いて施文順序の観察例を示した。線①は交点Aで最後に施文され、次に交点Bでは最初に、交点Cで二番目に施文されるなど、各線の施文順序が頻繁に入れ替わる。このことから、施文工程が各線を個別に完成させるものでないことは明らかである。

この方法は、線単位で作業を完結させる場合と比較すると、作業の停止・再開を頻繁に伴うため、作業量が増大する。こうした方法がとられた背景としては、先に指摘した、右から左に向かう線を最上段とする施文順序を維持することを目的としている可能性が考えられる。言い換えれば、本資料では、交点で最上段に位置する線の方法を統一することが、作業の効率化に優先するものとして意識された可能性が指摘できる。

また、刺繍の進行方向に対して直進する糸が常に最下段となるのは、直線を先行して施すことで後続しておこなわれる作業の基準とするために選択された工程であった可能性がある。

(2) 前掛けA

チェーンステッチによる文様は13本の線で構成され、縁辺部に並行する線が2本配置されており、展開部で完結する線は2本、残る9本の線は縁辺部・展開部に連続して配置される。縁辺部では、並行する線がいずれも布の端部を左に置いた状態で手前から前方に刺繍が進められるのに対し、逆行する線が2本認められる。

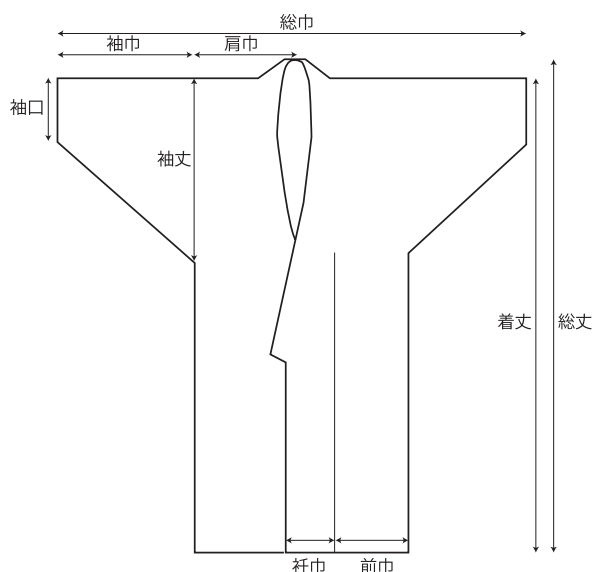


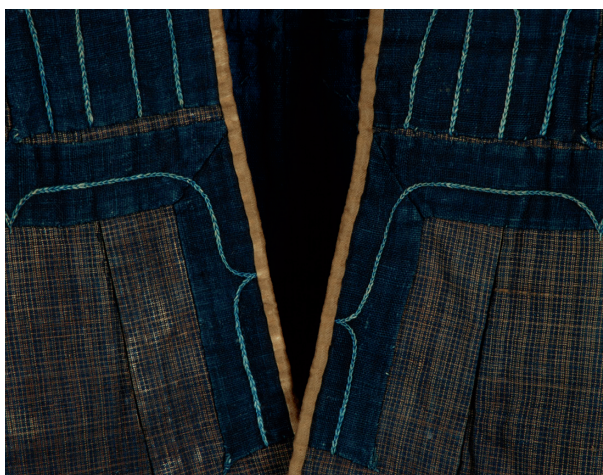
図1 計測値の名称
(アイヌ民族博物館（1991）を参考に改変)



1. 木綿衣前面



2. 木綿衣背面



3. 木綿衣襟部刺繍拡大



4. 木綿衣背部刺繍拡大



5. 前掛けA



6. 前掛けB

図2 資料の写真

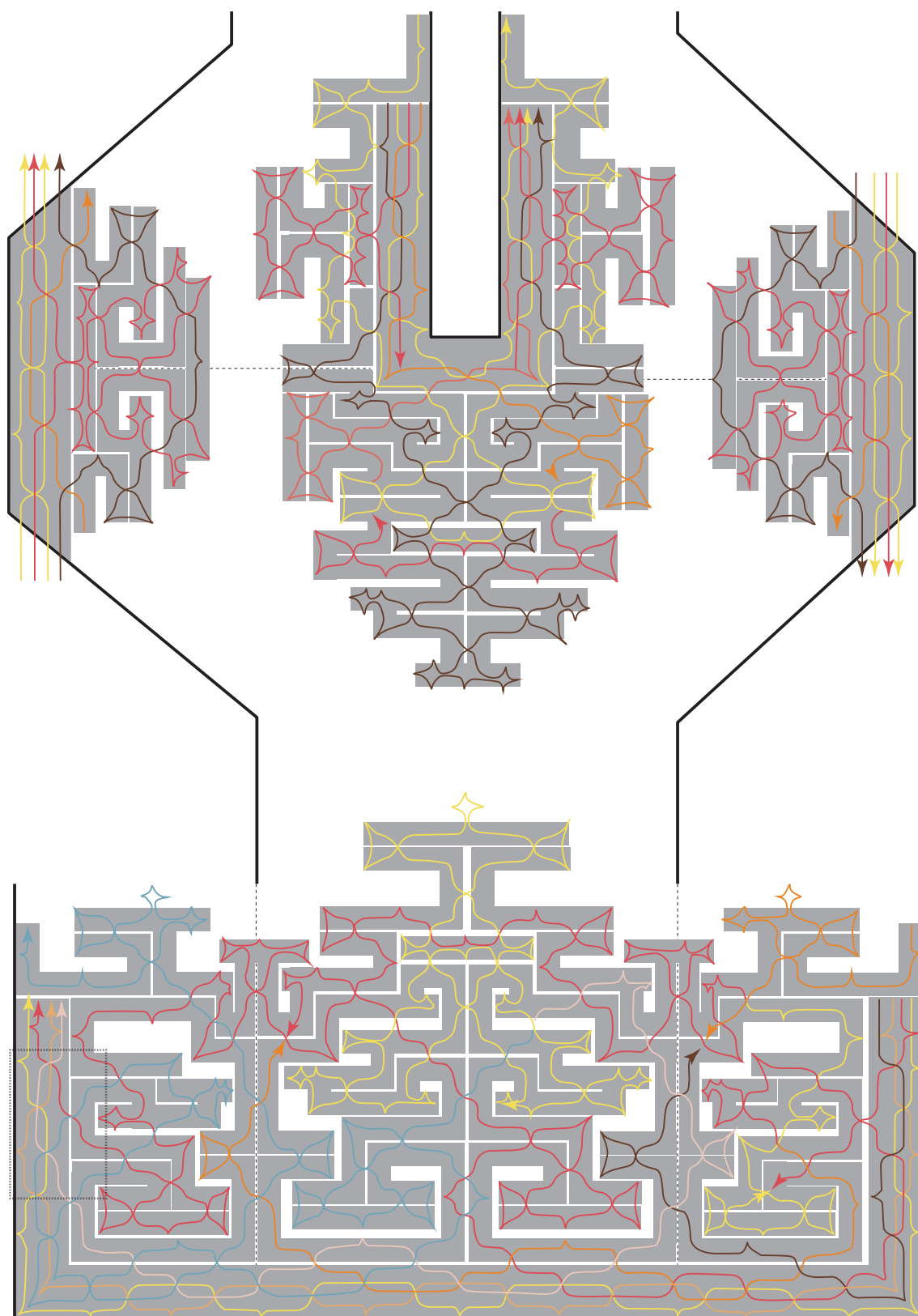


図3 木綿衣文様展開模式図（縮尺任意）
図5左の範囲を破線で示す

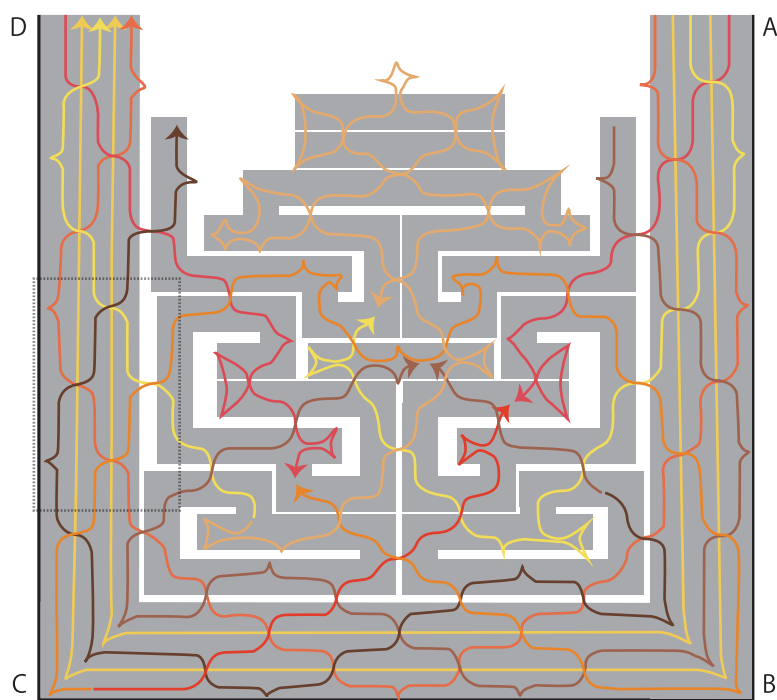


図4 前掛けAの文様展開模式図（縮尺任意）
図5右の範囲を破線で示す

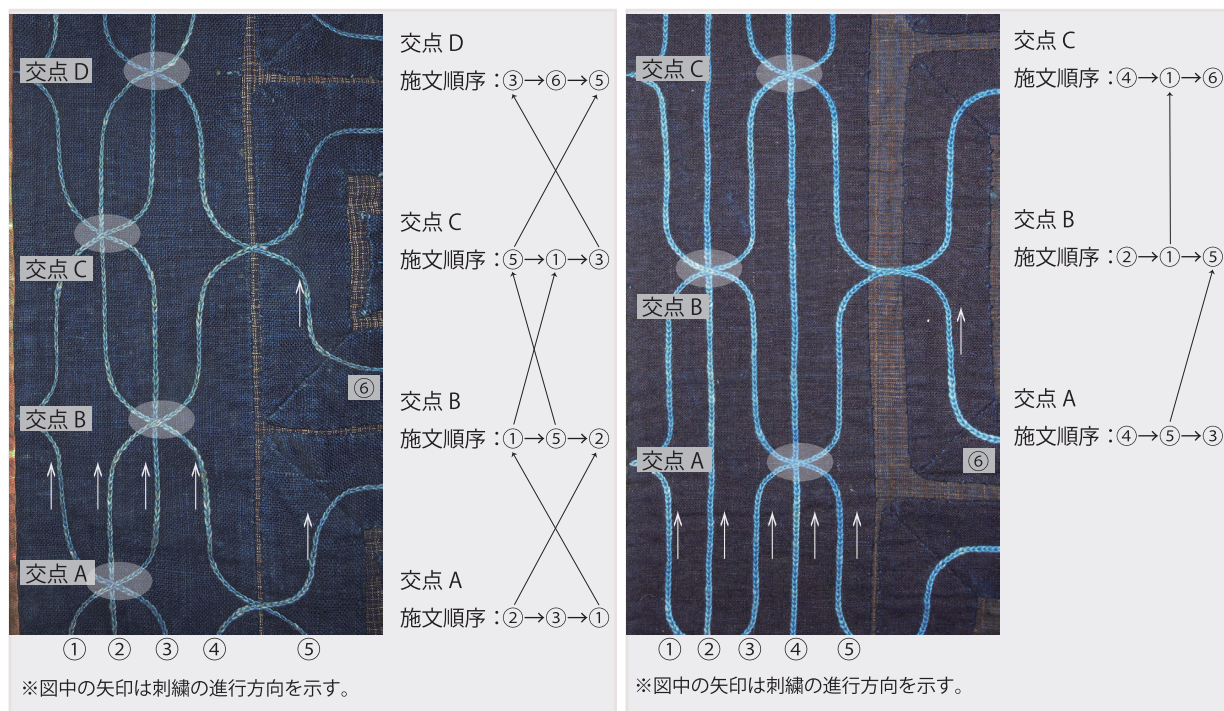


図5 木綿衣（左）と前掛けA（右）の刺繍に見られる施文順序（縮尺不同）

複数の糸が交差する点の施文順序は（図5右）、全ての箇所②・④線が最下部に位置する。②・④の上でその他の線が交差する際の施文順序は、辺ABでは7箇所全てで、刺繍の進行方向に対して右側から左側に向かう糸が上、左側から右側に向かう糸が下となる。一方、辺BCおよび辺CDでは、進行方向が逆行する線がそれぞれ1本認められ、交点の上下関係は4組8箇所のうち3組6箇所（75.0%）で対称をなす。

図5右では、交点Bでは左から右に向かう線③が最上段に位置するのに対し、交点Cでは右から左に向かう線⑥が最上段となり、最上段に位置する線の方向が対称をなしている。

本資料は、木綿衣と布地や刺繍技術に高い共通性が認められるが、文様の施文順序を示す交点の上下関係に着目すれば、木綿衣とは異なる傾向が認められる⁽²⁾。

謝辞

本稿をまとめるにあたって、資料寄贈者の大黒登美氏、乙部町教育委員会 藤田巧氏、市立函館博物館 霜村紀子氏、函館市中央図書館より貴重なご教示を賜った。記して感謝いたします。

引用文献

アイヌ民族博物館 1991, アイヌの衣服文化―着物の地方的特徴について―。
北海道庁商工課編 1930, 北海道商工名録, 北海出版社。

(2) ここでの指摘は、単に二つの資料のあいだに存在する施文順序の違いを指摘したもので、その背景としては製作者が異なる可能性や、同一の製作者が複数の施文順序を対象に応じて使い分けた可能性など、様々な解釈が生じうる。そうした議論に進むためには、今後、製作者が明らかな資料を含めて分析例が蓄積される必要がある。

Ainu Cotton Robe Passed Down in the Town of Otobe, Hokkaido

Taku OSAKA

This report is about one cotton robe and two aprons produced by Ainu and passed down in the town of Otobe, Hokkaido. These materials come with information that they were obtained from the Ainu by Wajin (majority Japanese; dominant ethnic group of Honshu) who lived on the Sea of Japan coast in southern Hokkaido from the 1850s to the 1900s. This is particularly important as the majority of

Ainu materials lack such background information.

According to observations focusing on the embroidery, the cotton robe and apron were all made using different processes. The descriptions regarding the embroidery techniques are presented in a new way, using both pattern development diagrams and photographs.